

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 トルストイ 『二老人』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



エフィームが巡礼した [《主のみ墓（聖墳墓教会）》](#)



[善きサマリア人のたとえ](#)



[フェルメール イエスの接待に立ち働く姉マルタと説教に聴き入るマリア](#)

第 29 回のツイキャス読書会の課題図書は、トルストイの『二老人』です。[朗読](#)はこちら
読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「二老人」の感想文

トルストイの「二老人」を初めて読んだ。トルストイの作品だが、元は民話を下敷きにした話ということだ。

エフィームとエリセイの二人の老人が連れ立ってエルサレムに巡礼に向かう。エリセイは途中で偶然行き会った瀕死の家族のために働き、お金も使い果たしてしまい、目的地にはたどり着かずに自宅に戻ってしまう。エフィームは目的地には無事にたどり着くが、聖地でもエリセイに先を越されたのではないかと、旅僧にお金を盗られるのではないかと疑心暗鬼に捕らわれていた。

二人が村に帰ったところ、反応は対照的だった。家族を信頼して家のことを任せていたエリセイの方は無事に戻ってきたことを歓迎されるが、何でも自分でやらなければ気がすまず、残した家族に仕事を任せることに不安を感じていたエフィームは予想通り放埒に振舞っていた息子の非を責め、後味の悪い帰還となった。

エフィームは最後にエリセイと会って気づく。エルサレムに巡礼に行くことが善行なのではなく、身近な周りの人たちを信頼し、自分の持っている物があれば惜しみなく与え、困ってる人がいたら助けるということが魂の救済に繋がるのだと。

この作品はキリスト教の隣人愛の大切さを説いた話なのだろう。

エリセイは気はいいが、特に意志が強いというわけではなく、どちらかというと無計画でいい加減な人物である。逆にエフィームは禁欲的で、意志が強く、結果的に目的地に辿り着き、初志貫徹したのはエフィームの方だった。これは情緒と理性の対立とも言える。

プロテスタント的な観点から見れば、エフィームが救済されてもいいようにも思えるが、トルストイのバックボーンはロシア正教だろうか？

一読して何となく納得してしまう話だが、宗教的なことまで考えようとするとは日本人の私には難しい。

(おわり)

『二老人』 感想文

私はエリセイの家族がみんな仲良しで幸せな様子が伝わってきて読んでいてホッコリしました。

神詣に行くというのは普通の旅行などとは違って特別な意味のある事なのでみんなで協力してあげるのは当然の事かもしれないけれど、ばあさんも死金をエリセイに渡してあげるし、嫁もへそくりを出したり、やさしい家族だなと思いました。

私のへそくりは、自分の為に使うように貯めているけれど、この嫁はきっと家族のピンチの時にも使おうと思って貯めていたような気がします。

家族みんながお金に必要な以上の執着心を持っていないという事と、お互いを信頼しているという事がステキな家族だなと感じるところかなと思いました。

信頼に価する日頃の行いなどがあつたからこそ、家のお金をこそげて家族にもお金を出してもらってまで、神詣に行けるのだと思いました。

また、エリセイも家族を信頼しているから家の事を全部まかせても、旅の途中で心配したりするような事もなく自分が正しいと思う事が出来たのだと思いました。

私はこのお話を読んで、ぼんやりだけど、エリセイ家族の事から規律を守ることは正しい事だと思うけれど、それを守ることだけが信仰ではなく、本当の意味での信仰とは何なのか教えてくれているように思いました。

エリセイも、その家族も神詣には行かなくてもそれと同じかそれ以上の事をしたんだと思いました。

(おわり)

『二老人』読書感想文

ふたりの老人が、神詣に行く話です。ひとは、真面目な百姓で煙草と酒をやらず、実際家なのに信心深いエフィームです。もうひとは、心のいい、快活で、酒、煙草をやり、うたうことが好きで、同じ名前の昔の預言者のように頭がツルリと禿げているエリセイです。エフィームは、ワンマン社長のような感じで、何事も自分の目で確認しないと気が済まない性分で家族、特に総領息子を信用していません。エリセイは、「みんなめいめい自分が主人だ、自分のためにできるだけのことをするがいいだ。」とあるように、神詣に出発する時、家族に対して事細かに指示を与えたエフィームとは違い、うちのことは何も言わず、家族を信用しています。皮肉な事に、帰宅後エフィームの息子は放埒に明け暮れ出迎え無し、エリセイの家は何も問題なく帰宅を歓迎されます。

神詣に出発したふたりは小ロシアの凶作地方の村で、はぐれます。エフィームは途中連れになった旅僧を疑う気持ちが芽生え、はなれたいはなれたいと思いながら、神詣を終えますが、自分の骨折りを神様が受けて下さったか、気にしています。お祈りする所で3度、神詣に行っていないはずのエリセイの神々しい姿を目撃します。一方エリセイは一杯の水を求めて訪ねた農家で飢えと病気で「死ぬのをまっている」だけの家族に出会います。エリセイは錨につながれて、どうしていいかわからないくらい神詣に行くか目の前で死にかけている人達に手を差し伸べるか、迷いますが、この先家族が自力で生きていけるようにしてから、スッと家族の前から姿を消します。結局、神詣には資金が足りず行けませんでした。

詣でてないけど、一杯の水を永遠に湧き出る泉にしたエリセイ、そのエリセイを通して、年貢を果たす事の本来を悟ったエフィームそれぞれの姿が描かれています。

「何をどうしなければならぬかということは、しぜんにわかってくるものだ」という記述が一番、響きました！

(おわり)

『二老人』 レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ 読書感想文

ロシアの片田舎に住まう敬虔なキリスト教信者のおじいさん二人がお礼参りの旅へのぼる。それぞれがそれぞれの道を辿って神の魂へ近づいた、二人の巡礼者のお話。

道は、二つに分かれた。一方は自分の頭の中で闘う。善とは何かを。1人の力で出来得ることは限られている。すべてを助けることはできないが、エリセイは自分が持ち合わせたお金を使い、尽くせるだけのことをしないと、魂が落ち着かない。もう一方は旅を続けるが、エフィームはいつも疑っている。お金の心配ばかりして。

お話では、100ルーブルの旅の資金がどのように使われたが描かれているが、誰のための巡礼なのか、神とは何かの答えへ導かれている。

善の手前と向こうにあるもの。人を助けること、それが純粋な善だとすると見返りは求めないし、エリセイは自分が行った行為を決して人に語らない。何故ならそれが偽善ではなく、こころからの神の導きだったから。眠れぬ夜に「助けなければ」と自分へ言った言葉は誰のものなのか、目の前に神さまが現われたのではなかった。神のこころは、自分のこころの中に見出すものなのだ。感謝の一言すら受け取らずに貧しい家族から去ってゆく。

人はそこに気づけるか、目を逸らしてしまうと罪を作ることになる。神の導きによって行った善が、そののちにもたらす清いこころ。自分には見えないけれど、それは最後に描かれている。

エリセイは手ぶくろもはずさず蜜蜂の世話をしていた。太陽は輝きあたりいちめんりに光を放っていた。金色の蜜蜂がつるつるに禿げた頭の上で冠のように輪を描き、後光のようだった。

西洋美術の歴史上、美しい宗教画はキリストもマリアもモチーフとして、数限りなく描かれている。神の啓示も信仰心も、物語のシーンと共に黄色や金色で装飾され、顕われている。表されているものはイエスやマリアの姿形だけではなく「汝のこころ」だったということ。

新たな気持ちで国立西洋美術館へゆこうと思う。今ならその美しさの中に自分のこころも映るような気がする。

「この世では神がすべての人に、死の刹那まで、愛と善行をもってその年貢を果たすよう命ぜられたのであることを」

こころは自分のものだから、せめていつでも磨いて善が偽善にならぬよう尽くしてゆきたいと思う。

(おわり)

『 エルサレムGO ガイドブック 』

そろそろ、エルサレム巡礼の旅に出ようと考えている、そのあなた！
悪いことは言わないからさ！このガイドブックを買って見ないかい？
なにに？そんなもの買わなくても、大丈夫って？！
ところがどっこい！そうは間屋が卸さないのが巡礼ってやつさ……。

<正しい巡礼の旅立ち方>

まず、理由をつけて旅立たないのはよくありません。

旅立ってしまったら、巡礼に向かうことに集中することです。

ここで、二人の巡礼者を例にあげましょう。

真面目なエフィームは、金銭の余裕がありながら旅立たず、旅立った後も家の心配ばかりしています。一方、資金を融通してくれる家族を持ったエリセイは、家のことなどさっぱり忘れて、平和と愛のうちに目的地に着きたいと願います。さらに祈祷や聖者の伝記を思い浮かべ楽しんでいきます。どちらが神の御心に添っているのか、よく考えてくださいね。

<正しい道草の仕方>

旅の途中では、神のお導きが必ずあります。その導きに対して、まず自らが何を成すべきか考えましょう。場合によっては、エリセイのように旅を断念する選択肢もあります。

目的地に固執して、目の前の死にかけた家族を助けないことは、心の中の神を見失うとエリセイは理解しています。信心は場所ではないことを覚えておきましょう。

<正しい祈りの仕方>

いくら聖地で祈りを捧げたとしても、自らの心持ちが大事です。祈りは「現象」に過ぎません。真面目なエフィームは、他人に対する疑心暗鬼に囚われて、聖地であっても神の傍に近づくことができないのがいい例でしょう。ところが、聖地を断念してまで人助けをしたエリセイは、聖地の一番いい場所で祈りを捧げることができました。祈りは、肉体ではなく「意志」なのです。

<正しい帰宅の仕方>

皆さん、家に着くまでが巡礼ですよ！まだまだ気を抜かないでください。

一年後、帰宅したエフィームは家族が荒れていました。あらゆる聖地を巡礼したのにも関わらず…。一方、聖地に辿り着かなかったエリセイは、家族に再びあたたかく迎えられます。何が違うのでしょうか？

神の御心に添っているエリセイの頭上には、金色の蜜蜂がまるで天使の輪のように円を描いて舞い上がります。神の祝福なのでしょう。

でも、エフィームも「巡礼に足では行ってきたが、魂じゃどうだか怪しい」と気付きました。気付きは大事なのです。

ガイドブックはどうだったかい？ どうかよい旅を…！

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『死の刹那まで、愛と善行をもってその年貢を果たす』

お金がなければ巡礼には行けない。また、神に呼ばれていなければ、巡礼には行けない。

そういうことを書いた宗教小説だと思った。厳格な自己規律を守って暮らしているエフィームに比べてエリセイは、嗅ぎタバコをやめられないなど、少しだらしないところがある。エルサレムは、キリストが十字架にかけられ、3日後に、復活した土地ではある。ロシア正教など、東方教会系のキリスト教徒がいまもなお、巡礼に出かけるそうである。とりわけ、キリストが埋葬された《主のみ墓（聖墳墓教会）》には、今でも多くの信者が訪れる。

エリセイは、貧困家族を助けるため、巡礼を諦めたが、彼の生き霊が、《主のみ墓》に現れたのをエフィームは目撃した。

生き霊現象は、現実には起こりうるのか？

エフィームが、教会で見たエリセイの神々しい姿は、彼の変性意識（催眠状態）がみさせた、幻覚ではないのか？

巡礼を通して、個性が顕在化する。エフィームの厳格な規範意識も、エリセイの隣人愛の実践も、その人の信仰の個性なのであって、どちらに優劣があるわけではないと思う。

エーリッヒ・フロムは愛するというのは人の可能性を信じることだ、と述べた。

旅僧をうとましく思うというのは、人の可能性を信じきれない、エフィームの弱さである。エリセイのふくろや脚絆にしがみつくと子どもたちの夢というのは、隣人愛を実践しきれない彼の弱さを責めている

巡礼の途上で、信者は克服しきれない自己欺瞞に向かい合う。日常生活のルーチンの中では決して、掘り下げることのない自己正当化の罫を自覚する。

信じることは難しいことだ。貧困家族を助けなければ、エリセイは、信仰を見失っていただろう。

いっぽう、エフィームも、エルサレムにたどり着いたのはいいが、帰途に、貧困家族の歓待を受けることで、手段が目的となって信仰を見失っていたことを自覚した。

信仰の危機の中で、彼らが共鳴し合ったとき、彼らの間だけに生き霊という現象が起こったのだと思う。

（おわり）

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

参考 《二老人》の下敷きとなったと思われるルカの福音書のエピソード

イエスがヨハネよりも多く弟子（でし）をつくり、またバプテスマを授けておられるということ、パリサイ人（びと）たちが聞き、それを主が知られた時、

（しかし、イエスみずからが、バプテスマをお授けになったのではなく、その弟子たちであった）

ユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。

しかし、イエスはサマリヤを通過しなければならなかった。

そこで、イエスはサマリヤのスカルという町においでになった。この町は、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにあったが、

そこにヤコブの井戸があった。イエスは旅のつかれを覚えて、そのまま、この井戸のそばにすわっておられた。時は昼の十二時ごろであった。

ひとりのサマリヤの女が水をくみにきたので、イエスはこの女に、「水を飲ませてください」と言われた。

弟子たちは食物を買いに町に行っていたのである。

すると、サマリヤの女はイエスに言った、「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」。これは、ユダヤ人はサマリヤ人（びと）と交際していなかったからである。

イエスは答えて言われた、「もしあなたが神の賜物のことを知り、また、『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」。

女はイエスに言った、「主よ、あなたは、くむ物をお持ちにならず、その上、井戸は深いのです。その生ける水を、どこから手に入れるのですか」。

あなたは、この井戸を下さったわたしたちの父ヤコブよりも、偉いかたなのですか。ヤコブ自身も飲み、その子らも、その家畜も、この井戸から飲んだのですが」。

イエスは女に答えて言われた、「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう」。

しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」。

女はイエスに言った、「主よ、わたしがかわくことがなく、また、ここにくみにこなくてもよいように、その水をわたしに下さい」。

イエスは女に言われた、「あなたの夫を呼びに行って、ここに連れてきなさい」。

女は答えていった、「わたしには夫はありません」。イエスは女に言われた、「夫がないと言ったのは、もっともだ」。

あなたには五人の夫があったが、今のはあなたの夫ではない。あなたの言葉のとおりである」。

女はイエスに言った、「主よ、わたしはあなたを預言者と見ます」。

わたしたちの先祖は、この山で礼拝をしたのですが、あなたがたは礼拝すべき場所は、エルサレムにあると言っています」。

イエスは女に言われた、「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」。

あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしは知っているかたを礼拝している。救はユダヤ人から来るからである。

しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝するときが来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。

神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」。

女はイエスに言った、「わたしは、キリストと呼ばれるメシヤがこられることを知っています。そのかたがこられたならば、わたしたちに、いっさいのことを知らせて下さるでしょう」。

イエスは女に言われた、「あなたと話をしているこのわたしが、それである」

『ヨハネによる福音書』第4章第1～26節

ある律法の専門家が立ち上がり、彼を試そうとして言った、「先生、わたしは何をすれば永遠の命を受け継げるのでしょうか」。

イエスは彼に言った、「律法には何と書かれているか。あなたはそれをどう読んでいるのか」。

彼は答えた、「あなたは、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神なる主を愛さなければならぬ。そして、隣人を自分自身のように愛さなければならぬ。」

イエスは彼に言った、「あなたは正しく答えた。それを行ないなさい。そうすれば生きるだろう」。

しかし彼は、自分を正当化したいと思って、イエスに答えた、「わたしの隣人とはだれですか」。

イエスは答えた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗たちの手中に落ちた。彼らは彼の衣をはぎ、殴りつけ、半殺しにして去って行った。たまたまある祭司がその道を下って来た。彼を見ると、反対側を歩いて行ってしまった。同じように一人のレビ人も、その場所に来て、彼を見ると、反対側を歩いて行ってしまった。ところが、旅行していたあるサマリア人が、彼のところにやって来た。彼を見ると、哀れみに動かされ、彼に近づき、その傷に油とぶどう酒を注いで包帯をしてやった。彼を自分の家畜に乗せて、宿屋に連れて行き、世話をした。次の日、出発するとき、2デナリオンを取り出してそこの主人に渡して、言った、『この人の世話をしたい。何でもこれ以外の出費があれば、わたしが戻って来たときに返金するから』。さて、あなたは、この三人のうちのだれが、強盗たちの手中に落ちた人の隣人になったと思うか」。

彼は言った、「その人にあわれみを示した者です」。

するとイエスは彼に言った、「行って、同じようにしなさい」。

『ルカによる福音書』第10章第26～37節

一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。

彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。
マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」
主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。
しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

『ルカによる福音書』 第 10 章第 38～42 節

注：信州読書会の主宰者である私（宮澤）はクリスチャンではありません。文学作品の読解の手がかりとして新約聖書を紹介しただけです。信徒の方からみれば、解説が不愉快かもしれませんがご寛容のほど願います。